栗木京子短歌における「戦争詠」に関する考察

――作者と作品の位相を中心として――

草木　美智子

一、はじめに

栗木京子短歌における特質の一つが「社会詠」であり、その数が圧倒的に目立ち増えたのが、第五歌集『夏のうしろ』であることも認知されている。栗木の「社会詠」の種類は多岐にわたるが、その中でも目立つのが「戦争詠」である。全一〇歌集で二八七首（七・三％）あり、その特徴は、歌材として「家族」が詠まれている点が挙げられる。その数は全一〇歌集で四一首ある。その内訳は、祖父四首、祖母八首、父三首、母五首、叔父三首、伯父一〇首、子六首、家族（夫、子）二首である。「家族詠」に注目した考察は、拙論「栗木京子短歌「戦争詠」の源流とその特質」（『大正大学大学院研究論集』第四五号、令和三年三月）と題して前半部分を論じている。本稿はそれを承けた後半部分で、副題を「作者と作品の位相を中心として」として、特に栗木自身と「戦争」を詠じた作品に注目して、栗木京子短歌にみる「戦争詠」の特質を考察する。なお、本稿における傍線等は、特に断らない限りはすべて稿者による。また、本稿の敬称については省略した。

二、「戦争詠」にみる作者と作品の位相

まず、栗木の「戦争詠」で作者自身が詠まれている歌を、第五歌集『夏のうしろ』から次に挙げる。

日常より金属消えし戦中を思へばわが身ぺらぺらになる

（「北限」）

この歌は、冒頭で挙げた拙論の第二節「戦争詠と父母」、第四節「戦争詠と伯父」で挙げた連作に含まれている。重複となるが、重要なので次に挙げたい。

戦争の来るまへ少女期の母が「花物語」に読みし月見草

ドレミファをハニホへと唱ふ世のありき戦中といふつめたき闇に

日常より金属消えし戦中を思へばわが身ぺらぺらになる

夏帽子振るこどもらよ遺影なる伯父とことはに戦闘帽かぶる
竜胆の咲く朝の道この道を歩みつづける復員兵あり
大鳥居を月はあまねく照らしをり記憶を殺す痛みやいかに
（「北限」）

この連作を、歌人で国文学研究者である佐田公子は次のように述べている。[1]

音楽の今し生まるるときめきに似て水面（みなも）より蛇あがりぬ（北限）
みづうみに水鶏（くひな）が翼おろすとき死者の手あまたつどひ来る見ゆ
（〃）
びび、びびと地軸と交信してをりぬ両手にアブラゼミをつつめば
（〃）
モルヒネを飲みて蝦夷菊写生せし子規に炎暑もうれしかるらむ
（〃）
戦争の来るまへ少女期の母が「花物語」に読みし月見草（〃）

右の五首は、「北限」後半の戦争の歌に繋がっていく。一首目は、流木を焚く歌から連想されて、水面からあがる蛇を詠う。蛇は、コブラのごとく楽しげに水中から地にすべり出てくる。蛇は、何かの企みを暗示し、後半の戦争の歌の導火線となっている。二首目の「みづうみに」の歌は、蛇の歌と対応関係にある。蛇は楽しげに水面からあがるが、逆に水鶏が翼を下ろすときの光景を、作者は沢山の死者の手が集まってくると見立てる。死者は、さらに戦死者をも暗示する。三首目のアブラゼミの歌も、短命の蝉が、地軸と交信しあう儚さに、戦時下の無線を暗示するかのごとくである。四首目では、子規を登場させる。子規は日清戦争に従軍し、帰途に喀血した。脊椎カリエスの激痛をおさえながら、死を予感する。そして、いよいよ太平洋戦争の起こる前の母の少女期を登場させ、次の戦いの歌を展開させる。

ドレミファをハニホへと唱（うた）ふ世のありき戦中といふつめたき闇に
（北限）
日常より金属消えし戦中を思へばわが身ぺらぺらになる
（〃）
夏帽子振るこどもらよ遺影なる伯父とことはに戦闘帽かぶる
（〃）
竜胆の咲く朝の道この道を歩みつづける復員兵あり（〃）
大鳥居を月はあまねく照らしをり記憶を殺す痛みやいかに
（〃）

確かに、佐田が指摘する通り、「戦前」「戦中」「戦後」、そして現在へという流れが認められるであろう。「戦中」が詠まれている「ドレミファを」と次の「日常より」は対の形式を成している。戦中、「敵性語」が排除されていく中、「イロハ音名唱法」によって音楽も変化せざるを得なかった。「ドレミファ」と慣れ親しんだ唱い方ではなく、強制的に「ハニホヘ」と唱わせる世界が存在したこと、「戦中」という理由で異議を唱えられない世界に栗木は「つめたき闇」と結句で表現しているのであろうか。さらに、次の「日常

より」では、「金属回収令」により金属が消えていった日常を詠む。戦争が始まるまでは、「金属」が存在するのが「日常」であったはずである。それが、「戦争」という理由で、消えていく。既に日本は「戦中」という「非日常」の状態へと変化していったことも示している。このような「非日常」の世界で、音楽をはじめとする芸術、生活への制限を強いられていた「戦中」を想像すると、作者は「わが身ぺらぺらになる」と表現するのである。「ぺらぺら」とは、本来、紙や布が「薄い」「弱い」ことを示すことから、栗木は「戦中」を思うと、自分自身が「薄く弱く」なることで実体が感じられず、また自己主張も許されない状況なら、自身の存在も薄くなるであろうと詠んでいるのではないか。

次の作品は俳人　渡邊白泉の句を詞書に引用したものである。

玉音を理解せし者前に出よ　　渡邊白泉

前に出よと言はれて罪をみとめたる少女のわれを包みし蜩（かなかな）

（「前に出ず」）

本小題「前に出ず」は、平成一三年（二〇〇一）九月一一日に起こった「アメリカ同時多発テロ」関連の歌が主となっている。それらの歌から発展し、掲出歌「前に出よ」で渡邊白泉の句を「引用」することで、「過去の日本」を作者自身がいる「現在の日本」に引き寄せて詠んでいる。俳人　渡邊白泉と栗木については、拙論「栗木京子短歌における「引用」の意図と展開―「俳句」の引用を中心として―」（『解釈』第六五巻第七・八号、令和元年八月）に詳細を譲る。

次に挙げる作者自身を詠んだ三首、

好きだつた映画スター

ブロンドのトロイ・ドナヒュー逝き夏も行きわがアメリカに遠く手を振る

友人の姉さんから着物の着付を習ふ

新しき衿を襦袢に掛けてゐる日本のわれの手は汚れゐるか

夜具畳みして長襦袢しまふとき戦（いくさ）を知らぬ身はうそ寒し

（「秋の日乗」）

について述べたい。本小題にある「日乗」という名が示すように、本小題には二〇〇一年九月（作者四六歳）の様子が刻々と歌に記録されている。例えば、九月一一日に発生したアメリカ同時多発テロに関連し、栗木は次のように詠んでいる。

9月11日

鉈彫りの円空仏見ればくらぐらとビルに喰ひ込みし刃（やいば）思ほゆ

旅客機より最期の言葉伝へたる電波もあの日空を飛びたり

軽き軽き電話握りて愛告げしをとこをみなのこゑ軽からず

大統領の妻はなにゆゑいつ見ても笑顔であるか次第に怖し

（「秋の日乗」）

これらは、日本にいる栗木が連日の報道を通して詠んだ作品であ

る。四首目の「大統領の妻はなにゆゑ」は、テロ発生後、連日画面に写される「大統領」ではなく、その「妻」に注目するのが栗木らしいと言えよう。非常事態でも常に笑顔を求められる「大統領の妻」という役割に、栗木は「怖い」と率直に述べているのである。次が、先に述べた作者自身を詠んだ三首を含む連作なので、再掲する。

好きだつた映画スター
ブロンドのトロイ・ドナヒュー逝き夏も行きわがアメリカに遠く手を振る

友人の姉さんから着物の着付を習ふ
新しき衿を襦袢に掛けてゐる日本のわれの手は汚れゐるか
素裸になりたる胴にタオル巻き紐締め羞しき樹木となれり
夜具畳みして長襦袢しまふとき戦を知らぬ身はうそ寒し

（「秋の日乗」）

歌に詠まれるトロイ・ドナヒューとは、一九五〇年後半から六〇年代前半まで青春スターとして活躍したアメリカの俳優である。一九五四年生まれの栗木にとっては、青春時代のスターであろう。記録によると、トロイ・ドナヒューは二〇〇一年九月二日に六五歳で亡くなっている。つまり、アメリカ同時多発テロの発生九日前である。それまで「世界の中心」であったアメリカで、その象徴でもあったニューヨークで、テロが発生したことに対する衝撃は大きかったはずである。栗木は、その衝撃と、繁栄時代を象徴とする青春スターの死を重ね、「わがアメリカ」が終わったことを歌に詠んだのであろう。さらに、「わがアメリカ」は作者自身だけでなく、同時代を生きてきた多くの人間を表現しているのではないか。

ちなみに、現在の栗木は「アメリカ」に対してどのように捉えているのか。それを理解する手がかりとして、例えば、最新歌集でもある第一〇歌集『ランプの精』では、トランプ大統領とアメリカについて次のように詠んでいる。

ネクタイの赤さは首より真直垂れ「アメリカ・ファースト」叫ぶトランプ
アメリカはそんなに弱くなつたのか小雨のなかの就任演説
顔に較べ小さきてのひら泳がせてネガティブな語の多き演説
オバマ氏と日本に来たる「黒いカバン」新大統領のパレードにも見ゆ
同盟を結びませうと榛の木は二月の夕日に誘ひかけをり

（「鋭きかたち」）

これらの歌からは、現在の栗木は「アメリカ」に対して肯定的に捉えていないことが認められよう。なぜなら、掲出歌「アメリカは」で栗木が詠むように、かつて栗木が感じた繁栄の象徴「わがアメリカ」は、今では大統領自らが「アメリカ・ファースト」と叫ばなければ成立しないのである。しかも、その政策は、強大な軍事力によって進められ、年々先鋭化している。そのようなアメリカの現在の危うさを、トランプのネクタイの「赤」で詠じているのだろう。栗木は、「繁栄のうしろ」「戦いのうしろ」を丁寧に見つめ直すこと

の大切さを大事にする歌人である（『夏のうしろ』あとがき　一七七頁）。「うしろ」を丁寧に見ることを忘れた現在の「アメリカ」には手を振って訣別するほかはないのであろう。

次の三首は、詞書「友人の姉さんから着物の着付を習ふ」の通り、日本文化を代表する「着物」と「テロ・戦争」について自身の立場を詠んだ連作である。テロの影響はあるが、直接的な攻撃を受けていない日本で、テロについて詠む自身は、過去の戦争体験もないのである。その自身を「戦を知らぬ身はうそ寒し」と詠み、葛藤を表現しているのであろう。ここには、「戦争」を知らない我が身を恐れ否定的に捉えている姿がある。また、作者には「戦争」を知らないことは罪悪ではないか、との思いもあったように思える。この点は戦争詠と作者を考える上で、重要な視点となるのではなかろうか。

これらの作品以外にも、本小題には、

炭疽菌の恐怖は兆す炭疽をば「炭そ」と記す新聞見つつ
掃きよせし落葉を焚けば火のなかに秋天の見ゆ摩天楼見ゆ
形容詞「うしろいぶせし」のこころなり雨降りつづき十月終はる
空爆を受けたるのちは雪の降る村にて子らの眼差の濃し
（「秋の日乗」）

のように、平成一三年（二〇〇一）九月から一〇月までが「記録」されている。これらに共通しているのは、日常生活で見聞した「報道」がきっかけとなって詠じられた作品になっているという点であろう。四首を簡単に押さえておくと、第一首目は、「アメリカ同時多発テロ」直後にアメリカで起きた「アメリカ炭疽菌事件」について詠じている。本件は、アメリカのテレビ局、出版社、上院議員に対し、「炭疽菌」が入った封筒が送られたバイオテロ事件であり、炭疽菌感染により五名死亡、数名が負傷した。当時のアメリカでも「白い粉の恐怖」と呼ばれ、恐怖心を煽るような報道が連日され、日本でも大きく報道された。栗木は日本で報道される際の「炭疽菌」の表記「炭そ菌」に注目し、掲出歌「炭疽菌の」を詠んでいる。「疽」は常用外漢字のため、新聞やテレビ等では混ぜ書きやルビを使用していた。しかし、栗木は「炭疽菌」と書かないことにより、柔らかく恐怖を和らげる意図があるのではないか、そしてその意図こそが反対に恐怖を増しているのではないかと示唆している。そこには、「わかりやすいこと」が決して良いことだとは思わない栗木の信条が見えるようである。例えば、本歌集では、

あかあかと沈む夕日よ円周率「3」で計算する子らの秋
（「茸の秋は」）

と、簡単に計算できるようにという当時の「ゆとり教育」の弊害について詠んでいる。常用外漢字だから、わかりやすいから、と「炭疽菌」を「炭そ菌」と表記する画一的にも見える日本のメディアに対し、栗木は違和感を覚え、それを「恐怖」であると詠むのである。そして、当時の気持ちを「うしろいぶせし」と表現しているのである。これは単に当時の一〇月の天候だけでなく、連日の報道で

見る世界の状況に対しての作者の素直な感情であり、閉塞感をも表現しているのであろう。因みに、「うしろいぶせし」は古語で「将来が気になる」の意。初出は鎌倉時代の軍記物語『源平盛衰記』で、使用例も同書以外確認されていない（『日本国語大辞典』第二版　小学館）。栗木の古語習得の背景が知られて興味深い。

次に挙げる第六歌集『けむり水晶』の歌は、連作となっている。

しろたへの紙ひかうきは芝の上に不時着をせり日本暑し

六十年前の夏

古今集仮名序におほきみ、すべらぎとありし人のこゑ敗戦告げき

尾の先で地面打ちつつ寝そべりをり敗戦の日を知るやこの犬

人はみな時代の共犯者であるか畔の向日葵ならびて咲けり

木苺のヨーグルト甘し半分だけ責任取りつつ生き来し我に

（「木でありし日の」）

これらの連作には「敗戦」と詠まれていることから、「戦争」についての連作であり、季節は「夏」である。「しろたへの紙ひかうき」は、戦時中の軍用機を暗示しているのであろうか。詞書「六十年前の夏」に、玉音放送により天皇が「敗戦」を告げたが、次の歌では現在の作者の生活に戻るのである。敗戦から六十年後、作者の傍らには犬が平和に寝ており、その姿を見て作者は「この犬は敗戦の日を知っているのだろうか、いや知らないだろう」と問うのである。

さらに、栗木は並んで咲く「向日葵」を見ながら、「人はみな時代の共犯者なのか」と自己に問うのである。「夏」の花「向日葵」は、花が太陽と同じ方向を向いて咲くことから「向日葵」と書くと言われている。戦争中であれば、「太陽」（＝天照大神）とは国のリーダーであり、過去の日本の戦争では「天皇」であろう。国民が「太陽」に向かって、同じ方向で進んでいく姿を「向日葵」の特性に喩えて詠んでいる。では、同じ方向を向き戦争へと進んでいった人々は、時代の共犯者ではないか、と作者は自己にもまた読者にも問うのである。その返歌が次の「木苺のヨーグルト」の歌であろうか。つまり、「人はみな時代の共犯者であるか」と詠み、自身もそうであると認めているのではないか。「木苺」は「甘い」「酸っぱい」を合わせた「甘酸っぱい」味のイメージがあるが、自身も不完全な「甘さ」同様に、半分だけ責任を取ってきたという負い目が表現されている。第五歌集『夏のうしろ』以降、鋭い「社会詠」を詠んできた栗木だが、やはりどこかで葛藤を抱えていることが窺える一首であると言えよう。

次の第七歌集『しらまゆみ』では、ソマリア沖・アデン湾における海賊対処行動（海上自衛隊）についての連作が詠まれている。

海賊対策のためソマリア沖に海上自衛隊派遣

海賊の制圧のためと言はるれば武器をうべなふわれこそ恐し

護衛艦その名も「さざなみ」「さみだれ」の脱力系なる名前さびしむ

セーラー帽の紐をきつちり耳たぶの前に掛けつつ隊員進む

海賊を振り切る「商船三井」の船テレビに映る現実として

紅茶積むまま難破せし船おもふティーバッグの糸引き上げながら

（「しらまゆみ」）

平成二一年（二〇〇九）七月施行の「海賊対処法」により、自衛隊はソマリア沖・アデン湾海域に護衛艦二隻を派遣する活動を開始した。諸外国との連携の結果、海賊行為の減少が伝わっているが、派遣当時は「自衛隊派遣」ということに賛否があったであろう。「海賊の」の歌でも、栗木は派遣には理解を示しながらも、「安全」のための武器使用に同意してしまう自身を「恐ろしい」と表現している。それでも、やはり報道で海賊から逃げる「商船三井」の映像を見ると、現実を認識し納得はしているようである。しかし、完全に賛成しているわけではなく、揺れ動いている。その葛藤が表出した連作であると言えよう。

次に挙げる第八歌集『水仙の章』では、栗木が旅行した沖縄についての歌が収められている。本小題の中盤では、過去と現在の沖縄について詠んでいるので次に挙げたい。

沖縄の桜は花ごと落つること知りてかぼそきその幹に寄る
裏山が軍用地ゆゑ恩納村役所立派なり夕日に映えて
金網の上には有刺鉄線の三列に張られ嘉手納基地しづか
軍用車ひた走りをり思ひやり予算にて高速料金要らねば
思ひやり予算はなにを思ひやるモスグリーンなる軍用車に問ふ
サンタンカ咲けりなにゆゑ沖縄の惨詠まざりしか上田三四二は
ひめゆりそばを吉川宏志が詠みしこと思ひ出しつつ島ラッキョウかじる

いしぶみに一束二百円の花捧げ祈りぬ旅行者われら

（「サンタンカ」）

これら連作で興味深い点は、歌に二人の歌人、上田三四二[2]と吉川宏志が詠まれていることである。「サンタンカ」では、昭和期の歌人（小説家、文芸評論家、医師）であり、自著で西行、良寛という仏教の死生観を追及した歌人を論じた上田三四二が詠まなかった「沖縄の惨状」について詠む。その一方で、栗木と同じ「塔」短歌会の現主宰である歌人、吉川宏志がひめゆりについて詠んだことを思い出し、歌に詠むのである。過去と現在の歌人の名を歌に詠むことで対比を成している連作であると言えよう。そして、旅行者である栗木自身も、「ひめゆりの塔」に献花をし、平和への祈りを捧げるのである。栗木が「旅行者」と詠むことにも、「当事者」ではない自身への距離を表現するという作者の意図があると言えよう。

同じ第八歌集『水仙の章』には、歯医者から「戦場」を連想する連作がある。

新年はまづ歯石を除りにゆかむ尖れる器具がわれを待つべし
歯石除去されて血の口すすぐときああ戦場は遠しとおもふ

（「うつくしき水」）

栗木は、歯石除去のあと、口をすすいだ水に混じる血を見て、「戦場」を連想するのである。栗木にとっても、「歯医者」は「日常」であるが、「戦場」は「非日常」なのである。現実における乖離を

思い、歌に表現したのであろう。

次は、一日一首の形式で発表した第九歌集『南の窓から　短歌日記2016』の歌を挙げたい。

二月二十九日（月）

歌人の竹山広さんは一九二〇年の二月二十九日生まれ。

姿勢よき竹山さんとのツーショット黄梅かをる窓辺に飾る

長崎県出身で被爆経験を持つことから「原爆歌人」と称される竹山広の誕生日に詠んだ歌である。歌人の荒井直子（短歌結社「塔」所属）が竹山広の歌を挙げ、次のように述べている。

背なか一面皮膚はがれきし少年が失はず穿く新しき靴『とこしへの川』

汲みきたる水を待ちゐよと言ひしかな踝の手を離しくれにき『葉桜の丘』

亡骸の子はその母に遇ひしかば白きパンツを穿かせられにき『残響』

私は戦後生まれで当然原爆の体験はないのだけれど、これらの歌を読むと、その場面が鮮明に目の前に浮かんでくる。そして人間という存在の本質的なかなしみのようなものをずしんと心に感じて、「ああ、わかる」という気持ちになる。いや、「わかる」というのは正確な言い方ではない。本当は全くわかってなどいない。歌を読んだところで、竹山さんが味わった苦しみを全く同じように味わうことはできないし、竹山さんの苦しみは私自身の苦しみにはなりえない。でも、これらの歌を読み、竹山さんが体験した苦しみに思いをはせることで、すくなくとも私は原爆というできごとについて全く関わりのない者ではなくなったというふうに思えてくるのである。（中略）

実際、竹山さんが戦後しばらくの間、「原爆を歌はうとしたが、原爆の歌を作ろうとするとその場面が必ず夢の中に出て来て苦しむ。そのため原爆の歌が作れなくなり、さうしたら他の歌も作れなくなつて、歌を放棄」（馬場昭徳「竹山広『とこしへの川』から『空の空』まで」／「短歌往来」二〇〇八年八月号）という状態になり、原爆の歌をつくるまでに実に被爆から十年の年月を要したことはよく知られている。

それにもかかわらず竹山さんがその苦しみをあえて引き受けて原爆の記憶を詠ったのは、「詠ひて誰に遺しゆかむといふならずただ一人おのれみづからのため」（『千日千夜』）などと詠われているけれども、やはりこの悲惨なできごとの記憶に言葉を与えることによって、それを体験しそして死んでいった者たちが間違いなくいたということを忘れたくないと意志したからにほかならない。[3]

このように荒井も述べているが、この竹山広の「原爆詠」への思いは、栗木の「風化させない」という意志のもとで「社会詠」を詠ん

でいる作歌姿勢とも重なる。それは、竹山広が、苦しみ葛藤しながらも生涯「原爆」と向き合い歌に詠んだように、「戦争・テロ」「震災」などのテーマを続けて詠み続ける栗木の姿でもある。栗木は「社会詠」を多く詠んだ第五歌集『夏のうしろ』で、評価されながらも、メディアからの情報を基に、鋭い比喩表現で詠むことを批判された経験を持つ。その後も「社会詠」を展開させていったが、常に詠むことへの葛藤は抱えてきたはずである。その一例として、第八歌集『水仙の章』でも、

目線高き歌を詠むなとどこからか矢の飛びてくるやうで振り向く

（「われも一束」）

と詠んでいる。しかし、その後も栗木は表面的には臆することなく、「社会詠」と向き合い続けていると言えるであろう。栗木にとって、原爆を体験し、葛藤しながらも歌に詠み続けた歌人である竹山広は、心の支えとなっているのではないであろうか。竹山との写真を窓辺に飾っていると歌に詠んでいるが、本歌集「あとがき」で栗木は次のように述べている。

歌集のタイトルは『南の窓から』としました。拙宅は下町の路地に建つ狭小住宅ですが、南側の部屋だけは窓が大きいので眺望を楽しむことができます。この部屋で歌を詠みながら、私は南の窓の彼方に広がる空や風や木々や、そしてさまざまな人たちに向けて言葉を発していたように思います。(4)

また、本歌集の巻軸歌は、

十二月三十一日（土）

翅があったらいいなあ。

今日といふ窓から明日といふ窓へぶーんと音を立てて飛びたし

である。この巻軸歌については、「窓」と詠んでいる点に注目する。本歌集「あとがき」の傍線部で述べているように、作者にとって「窓」とは、歌を詠み人々へ言葉を発信するものであり、また巻軸歌の「今日から明日」の意味からも「永遠性」を象徴とするようである。その「窓辺」に栗木があこがれる歌人の竹山広との写真を飾ることは大きな意味を持つのではないか。それは、生涯、被爆体験と向きあい、葛藤しながらも歌を詠んだ竹山の姿を支えに、これからも栗木は自身の「社会詠」を詠んで行くという無言の意思表示ではないであろうか。

最後に、第一〇歌集『ランプの精』から次を挙げたい。

二〇一五年九月十七日、安全保障関連法案が参議院の特別委員会で可決された。

渋谷で用事を済ませた帰路に国会前を通りかかる。

メロディをつけずに我は叫びたし雨の国会前に来たりぬ

打楽器を鳴らさず我は唱へたし傘を畳みて群衆に入る

隙間なく警察車両の並びをり「反対」叫ぶ声のうしろに

鉄柵には太きパイプの通されて太きパイプは雨弾きをり

大雨に濡るる抗議の人たちよ印象派の絵のやうにも見えて

晩年のモネは「日本の橋」描きたり流されさうな九月のこの国

東京に天はハバネロ降らせたりデモ隊の上に稲妻ひかる

雀ほどの小さなかたちかもしれずされど雀の怒りふくらむ

（「日本の橋」）

本歌集は、栗木の最新歌集であり、「社会詠」が目立ち、さらに「行動者」の視点で詠まれている点が特徴であろう。「視点」の変化については、拙論「栗木京子短歌における視点の変化に関する考察―傍観者から当事者へ、そして行動者の視点へ―」（『解釈』第六六巻第七・八号、令和二年八月）で論じているので、詳細はそれに譲る。

本小題の大きな特徴として、詞書にあるように「二〇一五年九月十七日」の「国会前」での出来事が、作者の「目線」で「記録」形式で綴られている点が挙げられる。栗木が作中に数字を記すことはしばしばあるが、読み過ごしてはならない。なぜなら、作者は数字に「時代を証言」する「クロニクル（記録）」の意味を持たせているからである。[5] この点を踏まえた上で、引用の作品をみていきたい。まず、「我は叫びたし」と栗木が雨の国会前に来た歌から始まり、次に「我は唱へたし」と群衆に入るのである。三首目の「隙間なく」、四首目の「鉄柵には」は、デモの様子を事実のみで描写した作品である。しかし、次の「大雨に濡るる抗議の人たちよ印象派の絵のやうにも見えて」で、栗木は突然客観的に自らを見るのである。そして、周囲にいる大雨に濡れている抗議の人たちが「印象派」の絵、風景のように見えたというのである。これは、今まで明確に見えていた人々が、大雨で輪郭を無くしたことが「印象派」の特徴と合致し、連想したこと、またその場にいながらも「俯瞰」している自身を喩えたと言えるであろう。その風景から、一九世紀半ばのフランスで起こった芸術運動である「印象派」の代表的画家であるモネを、さらにモネが描いた「日本の橋」を栗木は連想したのであろう。「庭」をモチーフとした作品群を描き続けたモネは最晩年期、白内障が悪化する中で「日本風太鼓橋（日本の橋）」を描いている。この作品は、「橋」の輪郭はなく、緑、赤、黄色、青等の色彩によって成立していると言えるであろう。栗木が「晩年のモネ」と詠んでいることから、この作品を思い浮かべていたのではないか。さらに、次の一首「東京に天はハバネロ降らせたり」へと連結していくのである。「ハバネロ」とは激辛で有名な唐辛子の一種であり、色は赤である。「我は叫びたし」「我は唱へたし」と群衆に自ら入り、突然周囲が「印象派」の絵のように映ってしまった栗木だが、この一首で再び「我」に返ったのであろう。その決意が、「雀ほどの小さなかたちかもしれずされど雀の怒りふくらむ」と歌に表出している。

このデモ参加から数日後、九月一九日未明、安全保障関連法が成立した。成立日を詞書にし、詠んだのが次の三首である。

九月十九日

午前二時に法律成りき迦具土は母を焼きつつ産まれ出でたり

午前二時に法律成りき迦具土は父の剣に伐り殺されたり

秋晴れの日本は首相をヒトラーに喩へようとも罰されぬ国

（「日本の橋」）

「迦具土」とは、「神産み神話」において、イザナギとイザナミの間に生まれた火の神を指す。出産時に母イザナミを火傷で死なせ、それに怒った父イザナギに十拳剣で殺される。その迦具土の血から神々が産まれたという神話である。[6] 成立した法律は、出産時に母を殺し、自らも父に殺された迦具土と重なり、共通するのは「死」である。「神話」では父に殺された迦具土の血から神々が産まれたとされているが、果たしてこの法律から次々に産まれてくるのはなにか。「死の連鎖」ではないか。このように栗木は、安全保障関連法成立した九月十九日の「午前二時」を両詠に詠み込み、「反戦の意思」を詠じたのではないだろうか。「亡国の法案」と「国生み神話」という対置の構造も認められる。

最後の歌「秋晴れの」では、青く澄んだ空が広がる秋の日本について詠んでいる。思い描く情景は美しいが、二句からは印象が変わる。つまり、日本という国は首相を、独裁者の典型と呼ばれるヒトラーに喩えても罰せられない国なのだ、と詠むのである。確かに、世界の独裁国家の中には、最高指導者をヒトラーに喩える、または批判することで罰を与えられる国も存在するであろう。言論の自由が認められる国となった日本に対して、作者は「いい国」であると詠むのである。しかし、これは言葉通りに「いい国」と捉えていいのであろうか。なぜなら、栗木は今までにも鋭い視線で批判をしてきた歌人である。その一例として、第五歌集『夏のうしろ』では、

味噌を溶く島国の朝　飢餓感を知らぬ胃の腑はセラミクスめく

隣室に武器の音聞くこともなく生き来て春の菜を刻みをり

戦（いくさ）終へし国の人らは行列すパンを求めて活字求めて

可愛（かわゆ）さを恐れよ　子供用地雷はペンやてふてふのかたち

うら若き母は笑みつつみどり児の陰（ほと）ぬぐひをり　日本は眠い

（「島国の朝」）

と、日本の現状を危惧し、歌に詠んでいるのである。また、先にも述べたが、第一〇歌集『ランプの精』でも、栗木は自らを「雀」と喩え、その怒りを国会前のデモで示すのである。

さらに、本歌集では、

原発も兵器も軍が管理する国をおもへば恐れの湧きぬ

（「木の花、草の花」）

と、やはり国のゆくえを危惧する歌もある。それらの点からも、作者は、確かに、日本は首相を独裁者に喩えても罰せられず、言論の自由も認められている。その意味では「いい国」であろう。しかし、本当にそうなのであろうか。誰にとって「いい国」なのか、と作者は読者に問いかけているのではないか。

三、おわりに

以上、栗木短歌の「戦争詠」における「作者」と作品の位相を考

察する一助として、全歌集の「戦争詠」の解釈を踏まえ分析し考察を行った。本稿では、特に「家族」を外し、「作者」自身に焦点をあて、行動を見ていくことを重視した。最後に、考察の結果、明らかになったところを整理し、まとめてみたい。

まず、第五歌集からの作品群に通底するのは「葛藤」ではないか。それは、第五歌集『夏のうしろ』でアメリカ同時多発テロを詠んだ二首、

友人の姉さんから着物の着付を習ふ

新しき衿を襦袢に掛けてゐる日本のわれの手は汚れゐるか

夜具畳みして長襦袢しまふとき戦（いくさ）を知らぬ身はうそ寒し

（「秋の日乗」）

と、第六歌集『けむり水晶』の二首、

人はみな時代の共犯者であるか畔の向日葵ならびて咲けり

木苺のヨーグルト甘し半分だけ責任取りつつ生き来し我に

（「木でありし日の」）

と、第七歌集『しらまゆみ』の一首、

海賊対策のためソマリア沖に海上自衛隊派遣

海賊の制圧のためと言はるれば武器をうべなふわれこそ恐し

（「しらまゆみ」）

から認められるであろう。しかし、第八歌集『水仙の章』で沖縄を訪れた栗木は、過去と現在の沖縄を見て、歌に詠む。それが、小題「サンタンカ」である。また、第九歌集『南の窓から　短歌日記2016』では、苦しみながらも被爆経験を生涯詠んだ竹山広の存在が栗木に影響を与えたことが明らかとなった。さらに、第一〇歌集『ランプの精』では、素直に自らを「雀」と喩えながらも、デモに参加し、その様子を「記録」するように作品に詠んでいる。このように、栗木自身の「戦争詠」も変化していったことが認められるであろう。

では、その変化と、「戦争詠」を詠むことの原動力となるものとはなにか。それは、やはり、過去の戦争で亡くなった伯父と、子を亡くした祖母、兄を亡くした母という「家族」の存在である。また、結婚、出産を経て子の母となり、自らの「家族」を持った栗木自身も、「戦争詠」を詠み続けていることが、その証左となろう。その点を確認した上で、小考のまとめを付すならば、

①栗木の「戦争詠」の原点は、「家族」にあり、その一員として作者も身近な家庭生活の中で葛藤を重ねながら「戦争」の現実を凝視している。

②栗木は「戦争」を詠ずるにあたって、「戦争」と真摯に対峙して、自己矛盾を抱えながら現実においてそれを体験しようとしている。

となろう。

（注）

（1）佐田公子『栗木京子の作品世界』（平成二〇年二月、短歌研究社）三二〇、三二一頁。

（2）上田三四二（一九二三～一九八九）は兵庫県出身の歌人、評論家、小説家である。京都大学医学部卒業後、医師となるが四三歳で癌になってからは、仕事を制御しつつ長い闘病生活を送った。その間、佐藤佐太郎に傾倒し、短歌における「魂の浄化」をはかる。歌集では社会情勢や政治をテーマにすることなく、慎ましい日常の感動を優しく表現したことで知られている。その姿勢は、吉行淳之介を筆頭とする「第三の新人」、次の「内向の世代」につながった。そこに太平洋戦争中を病弱に過ごした青年三四二の、複雑な心の印影がうかがえる。三八歳の時に書いた「斎藤茂吉論」により評論家としても評価されている。以上、『岩波現代短歌辞典』（岩波書店　平成一一年）の「上田三四二」の項（担当　佐伯裕子　七五～七六頁）を稿者が私にまとめた。

（3）荒井直子「記憶を詠うということ」（『塔』、平成二二年六月、塔短歌会）

（4）栗木京子「あとがき」（『南の窓から　短歌日記2016』、平成二九年、ふらんす堂）

（5）拙論「栗木京子研究―栗木短歌における「数字」の役割と効果を中心に―」（『國文學試論』、平成二八年三月、大正大学大学院文学研究科、九八～一一四頁）で述べているが、理学部出身である栗木は、「数字を使った社会詠」を詠むことで「事実を提示」し、「時代を証言」する「クロニクル（記録）」の意味を持つことを証明している。それは「数字」が事件や事故の記憶を風化させない役割を持つことを理学部出身である栗木は経験を基に理解しているからである。

（6）『国史大辞典』第三巻（吉川弘文館　一九四頁）「軻遇突智神（かぐつちのかみ）」の項（担当は尾畑喜一郎）によると「『古事記』では迦具土神と書く。伊弉冉（いざなみ）尊の子で、火之夜芸速男（ほのやぎはやお）神・火之古（ほのかがびこ）神・火産霊（ほのむすび）神とも呼ばれ、火の神をいう。『古事記』神代では、母神が火の神を生んだために陰所（ほと）を焼かれて死に、そのあと父神伊邪（耶）那岐（いざなぎ）命が火の神を斬り殺したといい、剣についた血および火の神の体から神々が出現したと伝える。迦具土神の体から八種の山津見神が、血から岩石神・雷神などが化生する話は、火山の爆発、また噴火に伴う火山弾、雷雨などの現象を神話化したものであろうという」とある。